

## 「懐かしい日々の想い」

多田 富雄著

免疫系をもとに「身体の自己」を世に問った名著『免疫の意味論』を目にしたときの感銘を今もわすれられない読者は多いはずだ。本書は、その著者が去年の五月、旅先で脳梗塞に襲われ、死の淵をさまよった際、遺稿として記した文章と、それまで書きとめておいた小文とをまとめたエッセイ集だ。本人はその後生きながらえ、再生した位置から当時の自分を別人のようになつかしく見つめている。

前半は、世界を飛び回った旅先でのことが中心をしめる。人類発祥の地アフリカで、今も太古から伝わる神話的生活をいとなむドゴン族との邂逅。タイの山岳地帯で麻薬撲滅活動を行うNGO訪問記。ヨーロッパ各地を回って感じたこと、とくに人間らしい「食」と「文化」を守る西欧の大都市にくらべ歴史破壊に近い日本の乱開発は、目にあまると指摘する。その視野の底には、つねに日本のうわつつらだけの近代化に対する警鐘がある。



## 死の淵で記した執念の一冊

後半は、著者の本業である医療、科学、文学から『能』の舞台へとつづく。なかでもくり返されるのは、ゲノム（生物固有のDNAのセット）の解析についてである。人間誰しもが持つヒトゲノムに関し、その普遍性だけでなく、遺伝子のわずかな相違から生まれる個性（多様性）の両面が尊重されるのが重要であり、それが人間の価値や基本的権利を守る基礎につながると訴える。

また若き日、同人誌をともに出していた江藤淳の自死について、医者立場からその病と死をとらえた文は胸につまった。幼児期に母をしくし、病弱だった江藤氏が、自づにやどった死への願望をおさえつける行為として文学を社会参加の手段に選んだとする一方、愛妻を失ったショックと病苦をもつ老人の鬱病のための後追い自殺という（症例）として見方も失わない。その上で著者は、あえて医療の上で、生への働きかけの可能性がどこかに残っていなかったかと自問するのである。

いずれにせよ、一歩違えば『遺稿集』になっていた本書は、透徹した静けさの中に、著者の執念を感じさせる一冊に仕上がっている。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）

朝日新聞社・2000円

◇ただ・とみお 1934年茨城県生まれ。免疫学者。「免疫の意味論」で第20回大仏次郎賞。